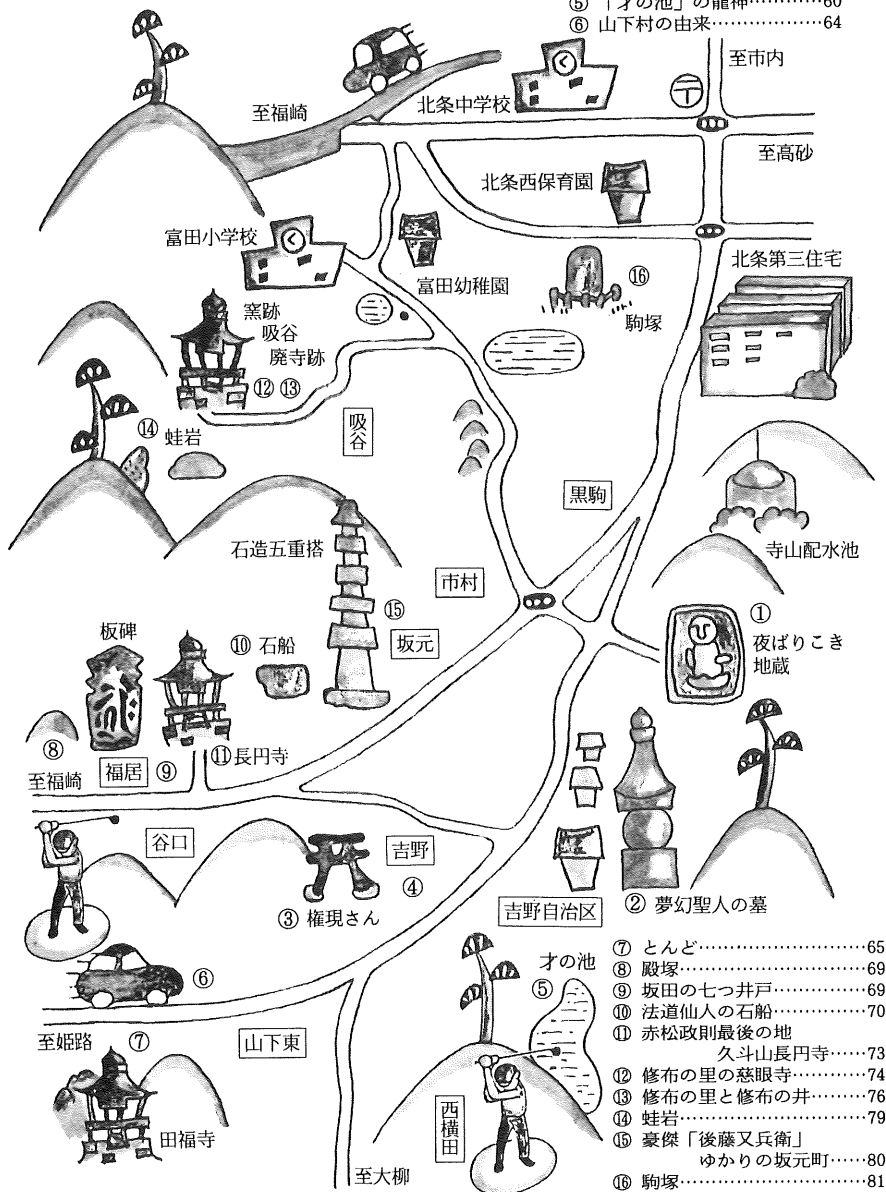


# 3 いにしえの寺院

6.3キロメートル

- ① 夜ばりこき地藏……………53
- ② 夢幻聖人の墓……………55
- ③ 吉野の権現さん……………58
- ④ 吉野町の古文書……………59
- ⑤ 「才の池」の龍神……………60
- ⑥ 山下村の由来……………64



- ⑦ とんど……………65
- ⑧ 殿塚……………69
- ⑨ 坂田の七つ井戸……………69
- ⑩ 法道仙人の石船……………70
- ⑪ 赤松政則最後の地  
久斗山長円寺……………73
- ⑫ 修布の里の慈眼寺……………74
- ⑬ 修布の里と修布の井……………76
- ⑭ 蛙岩……………79
- ⑮ 豪傑「後藤又兵衛」  
ゆかりの坂元町……………80
- ⑯ 駒塚……………81

・慈眼寺塔婆（県指定文化財）

弘安六年（一二八三）の造立年代が明らかで、鎌倉時代末期の石造五重塔として重要です。

・坂元石造五重塔（県指定文化財）

供養塔としては珍らしく全く素文であるが、その手法の古さから、造立は鎌倉時代初期と推定される塔婆で、県下でも最古にあたるものです。

・吸谷廃寺礎石・古瓦（市指定文化財）

吸谷廃寺は七世紀後半の頃、はりまのこ針間、ひのちや鴨国造によって建てられたと推定されるお寺です。今に残る礎石、古瓦が往時をしのばせます。

・吸谷瓦窯址群（市指定史跡）

廃寺跡より三〇〇メートル東南の山麓に瓦谷と呼ばれるところがあり、登り窯の跡があって、吸谷廃寺古瓦と同じ白鳳時代の瓦が採集されます。

・長円寺板碑（市指定文化財）

家型石棺蓋石の内面に弥陀三尊の種子を彫っています。室町時代初期の造立と推定され保存もよく貴重なものです。

・市村石仏（市指定文化財）

家型石棺の蓋石の内面に地藏尊を刻んだ石棺仏です。石棺仏というのは古墳時代の石棺に鎌倉時代以降になって仏像を刻んだものをいいますが、古墳時代に死者を葬って埋められた石棺が約七〇〇年の後の鎌倉時代から室町時代にかけての新田開発によって掘り出され、ちょうど民衆仏教の興隆と時期を同じくしたため、極楽浄土へのじよんぐ成仏を願う阿弥陀信仰のためのかっこうの石仏造頭の材料として利用されたと考えられます。市内には二一基が確認されていますが、全国でも加西と加古川周辺だけに見られるものですし、加西のそれは特に美術的価値も高いものが多くあります。この市村石仏は観応元年（一三五〇）の刻印があります。

## 夜ばりこき地蔵（市村町）

「ワイー、お地蔵さんが夜ばり（寝小便）こいとらあ」

「見てみい、これ見てみい、夜ばりこきの地蔵はんや」

近所の子どもが、はやしたてながら、お地蔵さんに石を投げつけていたそうや。

「こらあ、お地蔵さんに悪さするやつがあるかア」

「罰が当たるぞォ」

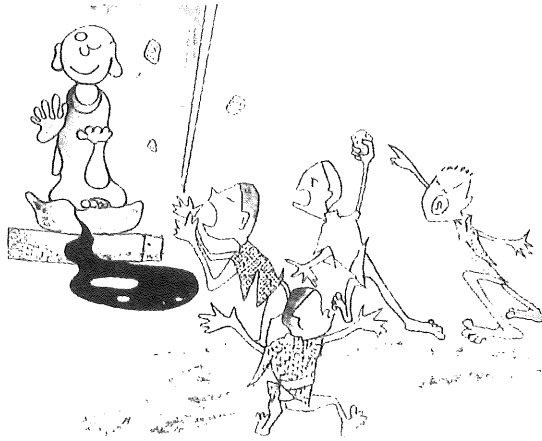
子どもたちを追い払ったおじいさんが、お堂の中をのぞいて見ると、お地蔵さんの足元が、ほんまに小便でもこいたように濡れていたそうや。

「そういうと昨日もあのがきどもが、夜ばりこきや」  
「いって石投げとったようやったが、気のどくな地蔵さんや」

「おおかた雨でも漏ったんやろうが、いつも夜ばりこいた言うて母親から叱られている子どもたちやで、その腹いせやろう」

ひとりごとを言いながら、おじいさんは、何かいい思案はないものかと考えたんや。





「そうや」

おじいさんは、急いで自分の家の納屋なやから荒縄あらなわの切れはしを取って来て、お地藏さんの腰をしっかりとくっ  
たんやて。

おじいさんはその足で子どもたちの所へ行って

「お地藏さんはな、もう絶対夜ばりなんぞこいてやない。お前たち、  
これから悪さするんやないぞ」

というて聞かせたんやそうな。

そのあくる日、地藏堂に集まった子どもたちは、不思議そうに腰を  
しっかりと荒縄でしばられたこの地藏さんを見つめていたそうや。そし  
てなあ、地藏さんの足元はひとつも濡れてなかったんやて。

それから何日もした後のことや。子どもたちのうちの一人がな、ま  
た寝小便したいうて、お母さんからそれはひどうに叱られたんやて。

あの時、荒縄でしばられた地藏さんの足元が、ひとつも濡れてい  
なかったことを思い出したこの子は、

「ひょっとしたら、もういっぺんあの地藏さんを縄でくくったら、

自分の寝小便かて止まるかも知れへん」

と思つたんやろ。繩を持って行つてこの地藏さんを、力いっぱいしばつたんやそうや。

そしたらなあ、不思議なこともあるもんや。ほんまにこの子の寝小便、治つてしもうたんやて。

こんなことがあつて、そのうわさは子どもから子どもへ、親から親へと伝わつて行つたんやな。

今でも、このお地藏さんは、そりゃあ靈驗あらたかや言うて、繩でしばつて願かけする人が多いんや。

### 夢幻聖人の墓（吉野町）

夢幻聖人は、段下町の人で、大変徳の高いお坊さんでした。

この夢幻聖人の墓といわれる五輪塔が、吉野町の夢幻山にあつて、それには慶長二年（一五九七）の文字が読みとれますから、それ以前の人であろうと思われます。

仏教の修業によつて、自分の死期を悟られたのでしょうか。ある日里人に深い穴を掘らせ、生きながら棺桶に入り、その穴に埋めるように申しました。

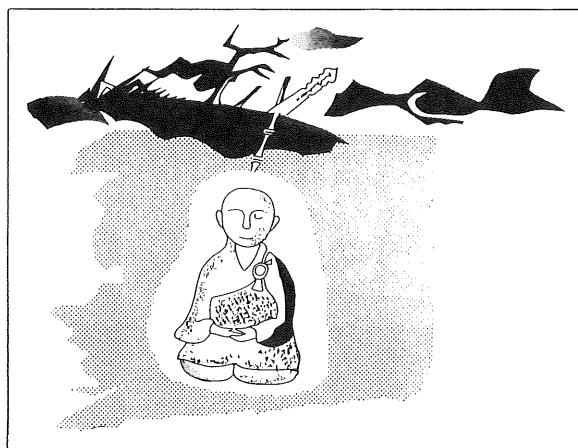
ただ、竹の節を抜いたのを一本地上に出して

「読経の声と鉦かねの音が竹の穴から聞こえないようになった時は、死んだものと思ってほしい。自分は必ず生まれ変わってくる。生まれ変わった時は、手のひらにそのことが書いてあるから、是非見つけ出してほしい。手の文字はこの土で拭わないと、絶対に消えない」といい残しました。

何日か後には、読経の声も段々と小さくなって、やがて鉦の音も止みました。里人は聖人の徳を偲しのび、涙ながらに土を覆って塚をつくつたと申します。

何年か後、備前の国（今の岡山県）のある城主に、待ちに待った世継よつぎが生まれました。城は若君の誕生でよろこびに湧きたちましたが、唯一心配なことがありました。というのは、この若君の手のひら一ぱいに、何やら文字のようなアザがあることでした。

おそろおそろ判読してみますと、夢幻聖人の生まれかわりであることがわかったのです。城主はすぐにその若君をつれて、夢幻聖人の墓に詣でました。そして墓の土で手を拭ったところ、たちまち字が消えたと申します。





そこで、城主は、前に里人が建てた塔と同じ形の大きな塔を建てて、盛大な供養をいたしました。慶長二年と彫つてある大きい五輪塔がそれであると古老は申し伝えていきます。

この墓に祈願すると、頭痛・歯痛が必ず治ると、遠くからの参詣があとをたちません。

(加西郡誌より)

## 吉野の権現さん（吉野町）

昔、むかし、山下新田といっていたこの村に、藤三郎とかいう名の山伏が住んでいた。藤三郎は修行のためにと、その数が知れないほど何度となく、大和大峰山に登ったそう。大峰山というのは、役の行者が開いた山伏の修験道場で、諸国からたくさんの方の修験者が集まって来て、厳しい修行をし、役の行者が一刀三礼の下に刻んだという吉野の蔵王権現におまいりした。

藤三郎が、何回目かの山上参りがすんで、この村に帰ってくる途中のことだ。後から見えかくれしながら一人の気高い老翁がついてこられたそう。不思議に思いつつも、やっとな村にたどりついて後をふり返った時には、もうその老翁の姿はどこにもなく、霧か雲が消えるように跡もなかったという。藤三郎は、これこそ日頃信仰している蔵王権現の化身に違いないと、村人と協力して社殿を建て、大和吉野から蔵王権現を迎えておまつりして道場を開いた。

道場には近郷近在からつぎつぎに修験者が集まって、大護摩を焚いたりしてにぎわったので、吉野吉野と云われるようになり、この村も吉野村と名を変えたそう。

昔の道場跡は、今は田になってしまい、社殿も江戸時代の初め頃大嵐で倒壊し、今のものは家綱將軍の頃再建されたものと聞かすが、東向きに建っているのは、はるかに大和の吉野の方に向いているのだそう。



## 吉野町の古文書（吉野町）

吉野町は、戸数わずか八戸であった元禄の昔から、二十数戸の今日まで、約三百余年近くも年ごとに村人が集い、書き継がれてきた「歳の当」の記録が保存され、現代も継続されています。

この記録の当番を「当屋」といい、二人ずつで交代し、正月十四日の祈年祭には、氏神に五穀豊作を祈ったあとに、前の一年間の出来事を書き、日本での出来事から町内の出来事の代表的なものが記録されています。

たとえば国内の主な出来事として、

宝暦事件（一七五八年）、第一次長州征伐（一八六三年）、伊能忠敬の全国測量（一八一三年）、桜田門外の変（一八六〇年）など、外交関係として、朝鮮人来日（一七一九年）、江戸へ唐船来（一八五三年）、さらに国民生活上の記録として、江戸大地震（一七〇三年）、大坂大地震（一七七五年）、島原大噴火（一七九二年）など、風水害・地震・噴火など自然の中でのたたかい、そして政治・経済・風俗・習慣・迷信など、先祖からの生きざまをくわしく書かれており、文献として貴重なものと高く評価されています。

## 「才の池」の龍神（西横田町）

横田町、ゴルフ場敷地内にある「才の池」を、昔から「雨乞い池」とも、「尼警女池」とも呼んでいます。この池は、「才の谷」にあるので、「才の池」と呼びますが、この谷には昔、王子山と天満山との両方から流れ込んだ水が、はけ口がなくて自然に谷に溜り、大きな深い淵ふちになっていました。それで、その頃里人は「才の淵」と呼び、底無しなの淵であったので、ここには龍が棲すんでいると信じていました。

才の谷の片方の山、王子山に大きなお寺がありました。ずい分昔のことですので、山号も寺号もわかりませんが、三十六坊もある大きな霊場であったといえます。その寺のあったころ、向かいの天満山への交通が便利になるように、才の淵の上に吊橋つりばしを架けていました。

ある年のことです。王子山の寺から火が出ました。おりからの強い風にあおられて、火はたちまちに全山を包みました。火のまわりが余りにも早かったので、逃げ場を失った人が多勢焼け死んだといえます。



その時、一人の尼僧が猛火の中に飛び込んで、寺宝の黄金の半鐘はんしょうを辛かろうじて背負い出しました。火を避けて天満山へ逃げようと、才の淵の藤づるの吊橋つりばしを渡りかけました。

ちょうど尼僧が、重い半鐘を背負って橋の中程まで走った時、すでに燃え広がった火が、山風に吹き下おろされて橋に燃え移りました。藤づるで吊った橋ですからひとたまりもありません。橋が焼け落ちるとともに、尼僧も鐘を背負ったまま淵に落ちてしまいました。

すると淵に棲んでいた龍が忽然ごぜんと現われて、その鐘を奪ってしまいました。

尼僧はたちまち大きな鯉になって、水中で龍を追いまわりましたが、ついに力つきて恨みを残したまま死んでしまったのです。

その時、王子山は全くの焦土しょうどと変わりはて、さしもの莊嚴華麗そうごんかれいをきわめた堂塔伽藍がらんも、跡もなく灰になってしまいました。そしてそれっきり再建される事はありませんでした。尼僧がせっかく持ち出した寺宝の半鐘も、淵の底深く沈んだまま、再びそれを見た者はありません。

里人は、黄金の半鐘をそのまま淵の龍に与えておくのを、大変残念に思いましたが、底知れずといわれた深い淵の水を干す方法も力もなく、また龍神の祟たたりを恐れもして、そのまま何百年も過ぎてしまいました。

ある年の夏、長い間一滴の雨も降らず、焼けるような日照りが続いて、どこの川も池も水が涸かれきってし

まいりました。何千年も昔から底を見せたことがないと言われた才の淵も、この時ばかりは水が涸れ、萎れた藻に覆われた底が、そこかしこに現われました。

それを見た里人は、黄金の鐘は底の泥の中に埋っているに違いない。掘り出すのは今だとばかり、鋤を  
持って大勢集まり、底の泥を掘りかけました。



ところがどうでしょう。今まで雲一つない青空だったのに、急に黒雲がわきおこり、雷鳴が激しく天を震わせ、電光は地を裂くばかり、山をも溶き流すような大雨が、うずまく強い風をともなって降りつけて来ました。天地は夜のように暗く、その闇をさいて稲妻が走り、山は轟々とうなりました。

泥を掘っていた里人は、恐れおののき、あわてふためいて、転んだりすべったりしながら、われ先に逃げ帰ってしまいました。

その後はまたたく間に水が満ち、再びもとの蒼々とした深淵しんえんとなりました。その時から、才の淵の鐘を掘るまねをすると、どんなお日照りの時でも、必ず雨が降ると言いらわされて来たのです。

寛永の元年（一六二四）とかに、また大旱魃かんぱつがあり、稲や畑作物はいうにおよばず、草も木も枯れはて、家畜もおれるほどでした。

そこで、近郷近在の百姓が多勢集まり、その時はもう「才の池」と呼んでいたこの池の鐘を掘り出しにかかりました。

案の定みるみるうちに大雨となり、田も畑も水が溢あふれました。

それから誰言うもなく、この池を「雨乞い池」というようになりました。今でも大旱魃の時には、この池の鐘を掘ると必ず雨が降るといつたえられています。そしてもう一つ不思議なことは、この池には時々片目の鯉こいが取れるそうです。それは、鯉になった尼僧が、片目であったからだということです。

（兵庫県学校厚生会「郷土の民話」東播編及び加西郡誌より）

## 山下村の由来（山下町）

昔、山下村は郡内きつての大村で、土地はよく肥え、山林も多かった。そのため一村で一つの荘をなし、「一ノ荘余田村」とよばれていた。

ところが、永祿年間に角野七郎兵衛という乱暴者があらわれ、村を大いに苦しめた。五百に余った村人もあいついでにげ出し、残った者も奉公に出る者が多くなり、たちまち半数以下にへってしまった。住民が少なくなれば田畑も荒れ、千石余の美田も半分以上が荒地にかえってしまったという。

その後、三木の別所氏の領地となったが、年貢の率は重く、未納がちになっていた。天正八年（一五八〇）の三木落城後は、姫路城主の羽柴秀吉に支配された。その頃、浪人の山下・中川氏がやってきて住みついた。かれらは、村人を指導しつつ開発にとり組んだ。こうして村はしだいに立ちなおっていった。

その後三、四十年のうちに山中・荒木・梶浦・小林・小川・衣笠などの浪人たちが住みついた。これらはいずれも武士の出であったので、かなりの金銀を持参して開発にあたり、今日の山下村の礎を築いたと伝える。

## とんど（山下西町）

山下西に伝わっている「とんど」はお当（頭・禱）の当番の人々を中心にして行われ、近頃ではまれにみるさかななものでした。

お当のしくみは、十二の干支えとにちなんで常に十二軒で奉仕するきまりとなっています。そして、その十二軒の家それぞれに自分の家の干支えとが決められています。その十二軒を、一組（子・寅・辰・午・申・戌の年の家）と二組（丑・卯・巳・未・酉・亥の家）の二組にわけ、一組と二組が隔年毎に当番をつとめ、その組のうちで、その年の干支えとにあたる家が番頭をつとめ、すべてのことをとりしきるようになっていきます。

正月十四日の午後になると、当番の人たちは各自に青竹をかついで番頭の家が集ってきます。神祭りの準備をする者、とんどを作る者、お当わたしの会の仕度をする者と、手ぎわよく片付けていきます。

とんどづくりは、持ちよった竹で直径二米以上もある輪をつくり、そのまわりに竹をゆわえつけ、高さ六米余りの先の方は一束にしぼり、日の丸の扇三本を開いて丸くたばねてかざりつけ、引綱を三本つけて仕上げます。

そして、年の暮に門前垣かち内の方六人で、わら十二束（一束二把）でつくり、寺の三門に松の内の間かかっていた大飾りや、子ども達が各家庭をまわって集めてきた飾りを、竹の輪のまわりに飾りつけます。



翌十五日朝になると、当番も非番もなく、みんなで川土手へ担いで行き、火のくるのをまちます。

それより先、番頭をつとめる当家の主人が伴を従え、神饌を持ってお当の社へ参り、お飾りにお燈明の火を移し、伴人が消さぬように河原まで運んできて、とんどに火をつけます。

やがて、ポンポンと火が勢いよく燃え上ると、子ども達は書き初めをかざしてはしゃぎ、女達はお餅を焼くなど村中総出のにぎわいとなります。

それぞれの家の主人は、燃えさしの竹を手頃の長さで切り、火を燃やしながら家に持ち帰り、その火でお燈明をあげ家内の無病息災を祈ります。古くは、その竹で菜箸をつくったり、芝つまみの箸になどしました。

最後に明方、恵方（吉方）へ倒し火を鎮めます。残った灰は、作物のこやし、病虫害の駆除として田にまきます。

それからお当たし会の会が始まります。次の組の番頭さ



んを正座にむかえ、非番の組の方を上座に、当番の組の者が下座に着席すると、当家の主人が出てきてお当わたしの儀式が行なわれます。ついで型どおりお神酒をまわし饗宴にうつります。

その献立にもちよっとしたきまりがありました。

○ 神饌（お当の神さまを祭る）

- ・けんさきするめ
- ・いりこ
- 五合
- ・二升の重餅
- ・お神酒

○ 向付

- ・金頭かながしらのおかしら付き（金頭がないときは「このしろ」・「ぼら」など）

○ 柿なます

- ・南天の葉をしき、串柿・大根・人参でつくったなますをもりつけ、その上に、きずしをかざる。

○ 魚煮つけ

- ・ぶりの切り身。一切れ五〇匁（約一九〇グラム）と決まっている。

※ ぶりは、姿のままもとめ、煮つけをとったあとは、五目ご飯につかう。

○ ひろ

- ・焼豆腐 二枚。（かどをこわさぬよう、すの入らぬようにする。）

○ 三つ鉢

・黒豆      ・田作り      ・数の子      のえんぎもの

○ お雑煮

・味噌仕立て。大根・人参・青ねぎ・とり・かまぼこなどを入れる。

・餅は、供えた重餅をひらき、焼いたものを、ほしだけ取り、汁をついでもらいいただく。

○ 五目飯

・ぶり      ・大根      ・人参      ・ごぼう      ・こんにゃく      ・ちくわ      ・高野豆腐      ・しいたけ

本膳の大飯碗には、五目飯を鼻突飯といわれるように盛れるだけ盛り、食べきらねば家へ帰れませんでした。そのため、会の終わり頃には家から子どもや大人までも助けにきました。

つつましく素朴なこれらの行事も、時代の流れにそって、いささかの消長をたどりながら続いていきましたが、昭和のはじめ頃には、とんでも十四日のたそがれにするようになり、お当わたしの会もその夜のうちにすまされるようになりました。

そして、戦中・戦後の苦しいなかでも、いろいろと工面しながら続けてきたこれらの行事でしたが、昭和四十年頃ですたれてしまいました。それ以後は、当年の家が、お当の社のお清めをするだけになってしまいました。

(中川つや氏の話から)

※ 「とんど」は、この地方の方言で、広くは左義長さぎちやうと呼ばれています。

とのつか  
殿塚（福居町）

福居町にある殿塚と呼んでいる、この塚は赤松の武将の墓であると伝えられている。

この塚のあるところは、別名という地名であったところから、別名忠徳と名のり赤松一統とともに天正六年（一五七八）中国地方平定の軍を進めてきた、羽柴秀吉軍と戦い、三木釜山城に籠城し善戦したが、兵糧攻めにあい力つきて同年城内で病死したと伝えられている。

## 坂田の七つ井戸

坂田庄（加西市坂元・福居・谷口・吉野・西南・東横田）には、七つの「セイメイ井戸」があります。

いずれも浅い四角の井戸で、美しく澄んだ水が渾々と湧き出ています。飲料水として里人の喉をうるおしているだけでなく、あふれた水は、田



をいく枚も潤し、豊かな稔りを約束しています。

この七つ井戸は、平安時代の頃に、時の天文学者安倍晴明が掘ったため、「晴明井戸」というとも、この井戸水が実に清らかな水で、いつも涸れることなく、人々の生命を生かし続けているため、「生命井戸」と呼ばれるようになったとも伝えられています。

どの井戸も、五輪塔の水輪で積み上げられています。これは、水輪が水を呼び入れると考えたからでしょう。

原形をよくとどめているものに、ぶろ谷井戸・石船井戸（福居町）があります。

（堀江良弘氏の話より）

## 法道仙人の石船（福居町）

加西市福居町久斗谷にある晴明井戸の傍に、四角で中が彫り削られた、大きな石があります。村人は昔からこれを、「法道仙人の石船」と呼びならわしています。

法道仙人は、大化元年（六四五）に天竺（インド）から紫雲に乗って日本にやって来て、法華山など加西

に七つもお寺を開いた人として有名です。この仙人は、修行によって空を飛ぶなど、いろいろな神通力を持っています。

ある時、石船に乗って法華山から西に向かって飛び立ち、お寺を建てるのにつごうのよい霊地を探していました。その時、光明を放つ三つの谷と、九つの峰を見つることができました。しかし、この地は龍神

諸天が守っておられる土地であることがわかりましたので、龍神に頼んでわけてもらうことにしました。龍神は、お寺を建てて霊場としてあがめるなら、その願いを聞き入れようと、快く譲ってくれました。このお礼として、龍神に毎日霊水を供養することを約束した仙人は、乗ってきた石船のそばに泉をうがいました。泉からは次から次へと清水が湧き出し、いつまでも涸れることがありませんので、今も村人たちを潤してあります。

法道仙人は、この地を久斗山と名づけ、立派なお寺を建立しました。これが久度寺で、今の久斗山長円寺にあたります。

なお、石船はその後、早魃かんぼうの時の雨乞いにしばしば使われ、不思議な力を示しました。村人たちが龍神と仙人にお祈りして、法道仙人の石船



を久度山の霊前にかつぎ上げて、雨乞いをしますと、必ず雨が降り出すのです。

最近の例でも、大正十一年（一九二二）の大旱の時、この石船を使って雨乞いをし、大雨になりました。

子どもから老人まで、村人が総出で小畠の石船の所に集まり、法道仙人の木像を安置して、仙人と龍神にお祈りした後、石船を藤蔓で縛って久斗山の長円寺霊前に引き上げました。大護摩をたいて法螺貝を吹き鳴らし、修験者と僧によって、祈禱をしてもらいました。空を焦す護摩の火が天に届いたのか、数時間後には雨が降り出し、夜になって大雨となったのです。このため、まさに枯死寸前の稲穂ももちなおし、収穫に恵まれることができました。

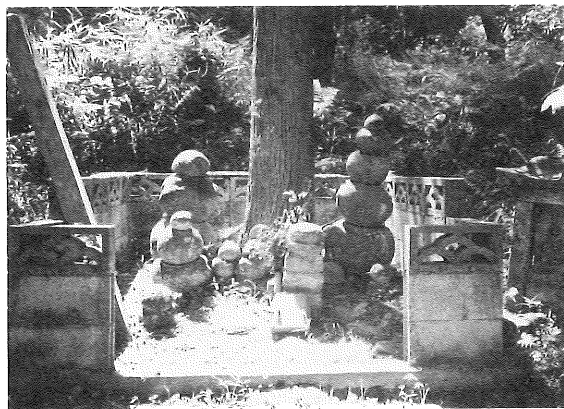
こんなわけで、久斗谷とその近郷は、旱の害を今まで一度も受けたことはありません。

（堀江良弘氏の話より）

## 赤松政則最後の地、久斗山長円寺（福居町）

福居町の長円寺は孝徳天皇の白雉年間に法道仙人が開基したと伝えられるお寺の一つです。本尊の十一面観音像や不動尊の毘沙門天像、聖徳太子像などすべてが法道仙人の作だと伝えられています。ある年火災にあって堂塔すべてが灰塵となりましたが、尊像は無事でした。正暦年間（九九〇年頃）長円上人がこれを再興して九間（十六メートル）四方の本堂を建て一大道場としました。この当時山内は八丁四方で七堂伽藍が建ち並び壮嚴をきわめたといえます。しかし天正五年（一五七七）七月、又もや兵火にかかり全部が焦土になりました。この時も尊像は無事に守られ、後、延宝六年（一六七八）実運上人が現在に見る本堂を再建したのです。

ところで、明応五年（一四九六）四月、嘉吉の乱で衰退していた赤松家を再興することに成功した赤松政則が、ここ坂田庄に狩をして、にわかに病気になる、この久斗山長円寺へ担こまれたのです。赤松の武将たちがあわたたしく寺へかけ集まり、手あつい看病をし、僧たちもお祈をしましたが、政則はそのまま息をひ



まどってしまったということでした。ときに四十二歳でした。久斗山長円寺は赤松の大将政則の最後の地となったのです。

(加西郡誌より)

### 修布里すふのさとの慈眼寺じげんじ (吸谷町)

吸谷町付近は、その昔、針間はりま鴨国かものかくにの修布里すふのさとと呼ばれていました。修布里の谷であるところから、吸谷となったといわれます。

ところで、この吸谷を開拓した人は、近江国からやって来た土岐載和という人なのだそうです。宇多天皇の寛平三年といえますから、今から千年以上も前の平安時代の初めにあたります。

開墾は年々進んでいきました。開かれた田は、反(十ア一





ル)から町(一ヘクター)へとだんだんに広がっていきましたので、初めに開墾した田を反田と名づけ、後に開いた田を町田と呼んで喜びました。今でも「たんだ」、「ちようだ」という地名が残っていますし、山すそに人々が「土岐殿の廟」とよんでいる五輪塔もあります。

さて、開拓がはじまってから、七、八年がたった頃、東は山城国(今の京都府)から西は備前国(岡山県)にかけての間に、悪い病気がはやり、多くの死者が出るようになりました。このため、都では大がかりなおいのりの法要がおこなわれたのですが、病氣退散のため、北西南の三方を山が囲み、東方だけが見通しよく開けた土地に、寺院を建てて、十一面観音の像を設置することになりました。そして、その場所に吸谷の地が選ばれたのだそうです。

さっそく、比叡山より実恵法師という位の高いお坊さんが呼ばれ、普請奉行として京の都からは、板倉民部之介という人がやってきました。お寺を建てるための木材は、わざわざ遠く大阪から運びこまれて来たといっています。

まる五年の年月と、数えきれないほどの人たちの労働によって、壮麗な七堂伽藍をもつ大寺院が誕生したのです。このお寺は、普門山慈眼寺と名付けられ、国土安泰の大祈願がなされたのです。

近くはいうにおよばず、遠く全国各地から参詣の人たちがやって来ました。そして吸谷が開かれていくとともに、慈眼寺もだんだんに寺域を広め、広大な寺院となって栄えたのです。

時が去り、世が移って、今では礎石三十個ばかりが観音堂の庭に淋しく残り、田畑の下から掘り出された古瓦とともに、私達に昔の栄華の一端を教えているばかりです。

しかし、この礎石や古瓦によって、慈眼寺が実は遠く白鳳の昔（今から千三百年も前）に、この地の豪族、針間鴨国造くしのみやつしによって建てられた大寺院であったことを知ることができるのです。

なお、この慈眼寺は、伝えによると、山下にいた赤松の家来浦上久松によって焼打ちされ、後かたもなく灰となってしまったということですが、建立の話とともに定かではありません。

（堀尾真治氏の話と吸谷伝説記より）

## 修布の里と修布の井（吸谷町）

昔、むかし、それは大昔の話じゃ。

このあたりにはまだ家もまばらで、人々は野原の草木にうずもれたように、細々と生活していたんじゃな。ここから見える広々とした田んぼも、おおかたはアシやスキにおおわれた沼地や荒地だったんだろう。たくさんの鴨の群が、そこで盛んにえさをあさっていたんじゃ。卵を産んでひなをかえす種類もあつ

たそうじゃ。そこでこの地方は、つがいの鴨が巢をつくって卵を産んだことから、「鴨国かもくに」とか「鴨郡かもこうり」とか呼ぶようになったそうじゃ。

元明天皇の和銅六年（七一三）とかに作られたという播磨風土記には、こんな話ののっているがな。

ある時、誉田別尊ほんだわけのみこと（応神天皇）がお供をつれてここへ狩をしにこられたということじゃ。修布すふの里というから、今の富田あたりじゃのう。人の気配に驚いた鴨が、バタバタと飛びたつて、修布の井戸のそばの大きな木にとまったのじゃ。尊は家来のものに、

「あれは、何という鳥じゃ」

とお問いになった。

「あれにいますのは、川に住む水鳥で鴨という鳥でございます。」品遅

部君べのみぎみ前玉まへたまという者が答えた。

尊はすぐに家来に命じてこの鴨を射させることにした。

腕に自慢の家来の射た矢は、さすがに強くもののみごとに一矢で二羽の鴨を射ぬいたのじゃ。

矢を負うた一羽は、峰を越えて山向うまで飛んでいってから、力つき



て落ちたそうなの。この鴨が山の峰より飛び越えた所を「鴨坂」（北条町古坂）、そして落ちた所を「鴨谷」と名づけられたのじゃ。

尊たちはさっそく獲物の鴨を料理して、鴨なべに舌つづみをうったということじゃ。

河内の二ヶ坂は、この時鴨を煮た坂なので「煮坂」と呼び、それがなまって「二ヶ坂」になったということじゃ。

「修布の井」と思われる井戸が吸谷町にあり「ふんじ井戸」と呼ばれていて今も共同井戸として使われており、どんな旱魃にも水の涸れることがない。昔お姫様がはまられたとか、慈眼寺の井戸としても使っていたとか、いろいろないつたえがある。

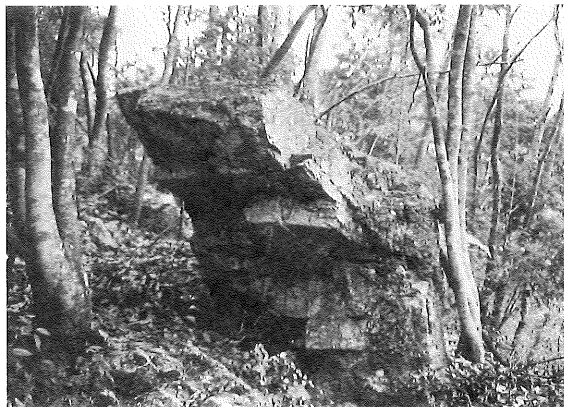
（播磨風土記より）

## 蛙岩（吸谷町）

吸谷町の一番奥には、山越えに八千種の余田（福崎町）へ抜ける道があります。今は人がやっと通れるか通れないかの、細いたよりないものですが、昔は人通りも多く年貢米を馬の背につけて姫路の領主へ送る行列なども、この道を通ったのだそうです。弥勒菩薩も通られたことがあるとかで、吸谷の人たちは弥勒坂と呼んでいます。この弥勒坂の中腹の道のすぐ横に、大人の三抱もある大きな岩があります。その形がガマ蛙そっくりなので「蛙岩」と呼んでいます。自然のいたずらとは言え、気味が悪いほどよく似ていて、じっと谷を見降しているのです。実はこの蛙岩が、毎年少しづつ山を下っているというのです。その動きは一年に米一粒といいますが、吸谷の人たちはこの蛙岩が、「修布の井」へ降りてくるのだと信じています。もしこの井戸へたどりついた時には、吸谷は沼になって水底に沈んでしまうのだといつたえているのです。

またみんなは、「蛙もこんな山奥じゃ淋しいんやろ、にぎやかな北条の町へ行きたいのにちがいないわ」と、話し合っています。

（藤井肇氏と堀尾真治氏の話より）



## 豪傑「後藤又兵衛」ゆかりの坂元町（坂元町）

室町時代の末期から、徳川幕藩体制が確立するまでの百数十年に及ぶ戦国の乱世は、才覚にまかせて、国士は切り取り放題というすさまじい時代で、英雄・豪傑が雲が湧き立つように群がり出た。

そんな中でも横綱格はもちろん、後藤又兵衛である。

加西市坂元町の後藤平一さんは、又兵衛から数えて十六代目にあたる血筋だという。後藤さん方には、又兵衛基次が陣中で使用したという槍や、石田三成が所持していたのを又兵衛が譲り受けたという脇差などの遺品が伝えられている。

（神戸新聞「兵庫探検」より）

## 駒塚（北条町黒駒）

昔、応神天皇の頃、神功皇后の命によって酒造りに適する土地を探していた「酒看都子」という人があった。お酒はその頃には人々に靈薬としてもはやされ、神殿に供えることはもちろん、朝廷への献上品としてもなくてはならないものだったので。酒看都子は方々の地を探して歩きましたが、なかなかよい所はみつかりません。やっとのこと、北条の地が米の質といい水のよさといい清酒を醸造するのにすぐれていることを見つけて、ここで酒造りをはじめました。

酒見ということばはこれから出たのだといえますし、宮水として酒造りに使った井戸というのが、今も住吉神社に空井戸となって残っています。

一説に、今の住吉神社は、もと黒駒に鎮座していたのだといい、向山の泉谷には平地があつて、古井戸も残っていますし、その前は、今も宮前という地名が残っています。

黒駒のほぼ中央に、「駒塚」とよばれる一坪（三・三平方メートル）ばかりの小さな田墳があります。これは、住吉の神が乗った黒い神馬を葬った所といい伝えられています。また、かつての三重の里の中心はこの付近にあり、国造許麻を埋めた塚とも、更には酒造りをはじめた酒看都子を葬ったのだとも伝えられています。

